

令和元年6月14日現在

機関番号：32689

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2016～2018

課題番号：16K13402

研究課題名（和文）会計学研究方法の構築

研究課題名（英文）A Reconstruction of Accounting Research Method

研究代表者

八重倉 孝（YAEKURA, TAKASHI）

早稲田大学・商学大学院・教授

研究者番号：90308560

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,700,000円

研究成果の概要（和文）：規範的研究と経験的研究のそれぞれに関する検討の結論を総合することによる会計学研究方法の確立を試みた。具体的には、規範論・経験論の垣根を越えた、会計学の統一的な研究方法についてとりまとめた。その過程で、既存の研究に大きな瑕疵が存在する事が明らかになった点について各論の検討を行った。研究成果の一部は学会報告および学術誌掲載に至った。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の特徴は、規範的会計研究と経験的会計研究を融合した会計学の研究方法を確立するところにある。現在の会計学研究の状況は、これら両者の研究が完全に分断されており、このことが会計学の進展に対して大きな障害になっている。しかし、大半の研究者は規範論または経験論のいずれかにのみ依拠しているため、規範論として優れた研究であっても、外的妥当性に欠けていることが多いいっぽう、経験論として優れた研究であっても、内的妥当性に欠けているということが常態化している。本研究は両者の長所を取り込むことによって、（分断された形では期待できない）内的妥当性と外的妥当性のバランスのとれた研究方法を確立することを試みた。

研究成果の概要（英文）：I tried to establish the accounting research method by combining the conclusions of examination about each of normative research and empirical research. Specifically, I summarized a unified research method of accounting that transcends the normative theory and the empirical theory. In the process, I examined each point so that it became clear that there was a major deficiencies in existing research. Some of the research results have been published in academic journals and journals.

研究分野：会計学

キーワード：研究方法 条件付規範的会計研究

1 . 研究開始当初の背景

規範的研究と経験的研究は「棲み分け」が発生しており、お互いに干渉せずにいずれかの研究手法の中で研究を完結させるという状況が発生している。この状況は、外的妥当性に欠ける規範論研究と、内的妥当性に欠ける経験的研究の濫造を招いており、現在の会計学研究が閉塞的状况に陥っている主たる原因となっている。

この状況の打開を図るために、本研究では Mattessich(1995)が提唱した Conditional Normative Accounting Methodology (条件付規範的会計(研究)方法論, CoNAM)を出発点として、規範論と経験論を融合した研究方法論を構築する。

<引用文献>

Mattessich, R., Conditional-normative accounting methodology: Incorporating value judgments and means-end relations of an applied science, *Accounting, Organizations and Society*, 1995(20), 259-284.

2 . 研究の目的

本研究の目的は、現在分断された状態にある規範的会計研究と経験的会計研究の研究方法を融合し、科学哲学の知見に基づく会計学の研究方法を確立することにある。

本研究の目的を達成することによって、現在分断されている両研究の長所を取り入れた、内的および外的妥当性のバランスのとれた会計学の研究が可能になる。さらに、会計目的の達成を会計研究の目的と位置づけ、そのための最適手段を明らかにするため、結果として「会計研究の実務からの乖離」という批判に応えることが期待できる。最後に、本研究の成果は学術論文の査読制度と、研究者養成教育におけるスタンダードを提供するものになり、学界全体の研究品質の向上に寄与する。

3 . 研究の方法

「会計学が応用科学である」とする Mattessich の出発点の確認：会計学を純粋科学として捉える(ように見える) Sterling らの主張との対比において、会計学が応用科学であることの確認をおこなう。さらに、応用科学の採るべき研究方法について、臨床医学や工学などの他の応用科学における研究方法の検討と、それらのうちで会計学研究に援用が可能な手法の有無について検討する。これらの検討の背後にある科学哲学、とくに認識論に関して本研究の出発点を明確にする作業も行う。

規範論研究において、経験論研究から得られた知見を演繹の一部として導入する方法の検討：規範論研究の演繹の枠組みの中で、(ほんらい帰納の枠組みから得られたはずの)経験論による知見を援用する場合にその知見が満たしているべき条件について検討する。具体的には、どのようにして経験論からの知見が十分な信頼に値するか否かを判定する方法を検討する。

経験論研究において、規範論研究を研究の与件として導入する方法の検討：現在の経験論研究において十分な理論的裏付けをもって(疑似)実験を行っているケースは極めて希である。そのため研究結果の内的妥当性も極めて低いものばかりである。本研究では経験論研究を行う際の前提として最小限行われるべき規範的理論研究の水準について検討する。具体的には、仮説検証の手続きに耐えうる理論のあるべき形について明確にする。

上記二つの検討の結論を総合することにより、規範論・経験論の垣根を越えた、会計学の統一的な研究方法についてとりまとめる。

4 , 研究成果

平成28年度は「会計学が応用科学である」とする Mattessich(1995, 2002)の議論の確認を行い、会計学を純粋科学として捉える Sterling らの主張との対比において、会計学が応用科学であることの確認をおこなうことが本年度の主要なテーマであり、関連文献の精査を行った。この結果、Mattessich が提唱する Conditional Normative Accounting Methodology (CoNAM) が、規範論と経験論を繋ぐ結節点になりうることを確認した。いっぽう、計画していた Mattessich 教授とのインタビューは教授の高齢のため実施できなかった。

また、研究方法の各論についての分析の端緒として、経験的研究において用いられているデータの妥当性について検討を行った。ここでは国際会計比較研究に頻繁に援用されている La Porta et al. (1998)が提供しているデータセットを分析し、そのデータが全く妥当性に欠けて

いることを明らかにした。

平成29年度は経験的研究の再検討をおこなった。とくに、規範論研究の演繹の枠組みの中で（ほんらい帰納の枠組みから得られたはずの）経験論による知見を援用する場合にその知見が満たしているべき条件について検討した。具体的には、どのようにして経験論からの知見が十分な信頼に値するか否かを判定する方法を検討した。

検討の過程で、経験的研究が依拠するデータの信頼性について重大な問題があることが明らかになった。La Porta et al. (1998, 法制度の国際比較)や Hofstede (1980, 2001, カルチャーの国際比較)のような、きわめて影響力があり、かつ頻繁に二次利用されているデータに妥当性が欠如していることが明らかとなった。前者の問題点については辻山編著(2018)の一章として公開している。

また、経験的研究が統計的分析を行う際に依拠するモデルにおいて、モデルそのものの妥当性が疑わしいもの（たとえば Jones モデル）が、なぜ会計研究の（ひとつの）中心であり続けているのかについて検討を行った。最も簡単な説明は会計研究自体が（科学的反実在論者が指摘するような）科学的事実を目指しているのではなく、経験的に十全な「理論」構築を目指しているのみ、という説明である。本プロジェクトにおいては科学的実在論の立場から会計学研究の再構築を目指しているため、現状のモデルの濫用についていかに是正すべきかを検討する必要があることが明らかとなった。

平成30年度は、前年度までに得られた成果に基づき、規範的研究と経験的研究のそれぞれに関する検討の結論を総合することによる会計学研究方法の確立を試みた。具体的には、規範論・経験論の垣根を越えた、会計学の統一的な研究方法についてとりまとめた。その過程で、既存の研究に大きな瑕疵が存在する事が明らかになった点について各論の検討を行った。研究成果の一部は学会報告および学術誌掲載に至った。

今後、現時点で未公開の研究成果について、学会報告および学術誌掲載にむけてさらに作業を継続する予定である。

< 引用文献 >

- Hofstede, G., *Culture's Consequences: International Differences in Work-related Values* SAGE, 1980.
- Hofstede, G., *Culture's Consequences: Comparing Values, Behaviors, Institutions and Organizations across Nations*, SAGE Publications, 2001.
- La Porta, R.; Lopez-de-Silanes, F.; Shleifer, A. & Vishny, R., Law and Finance, *Journal of Political Economy*, 1998(106), 1113-1155
- Mattessich, R. V., Accounting Schism or Synthesis? A Challenge for the Conditional-Normative Approach, *Canadian Accounting Perspectives*, 2002(1), 185-216

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 1 件)

八重倉 孝 『内的妥当性の追求』会計, 195巻1号 27-35頁 (査読なし)

出版社によるウェブサイトの該当なし。

〔学会発表〕(計 2 件)

1. Takashi Yaekura, 'Know Your Data before Using Them' Academy of Business Research Conference, 2017

2. 八重倉 孝, 内的妥当性の追求, 日本会計研究学会全国大会 2018年

〔図書〕(計 1 件)

八重倉 孝 「先行研究を無批判に援用することの危険性について」 辻山栄子編著 『財務会計の理論と制度』2018年, 中央経済社 193~199頁。(総ページ数 389)

〔産業財産権〕

出願状況(計 0 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年：
国内外の別：

取得状況（計 0 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等
（該当なし）

6. 研究組織

(1) 研究分担者

研究分担者氏名：八重倉 孝
ローマ字氏名：YAEKURA, TAKASHI
所属研究機関名：早稲田大学
部局名：商学学術院
職名：教授
研究者番号（8桁）：90308560

(2) 研究協力者（該当なし）

研究協力者氏名：
ローマ字氏名：

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。